

## ～「ここすき」学びの記録～

# 「行ったり来たり」が丈夫で美しい織物を創る。

\*「ここすき」に初めて来た日から、集中力と創造力を発揮して、魅力的な遊びを次々に展開したAさん。一人で積木を長くつなげたり、お手玉をボトルに詰めたり、トングを使って器に入れたり、今まさに1歳児に伸びる力を存分に発揮しながら、主体的に遊び込み、自分の世界をどんどん広げていきました。



\*でも、ある日、Aさんの様子がいつもとちがいます。「安全基地」であるお母さんの膝に寝転がったり、背中にぴったりくっついて、そこからみんなの遊ぶ様子を見ていたり…。何か不安なのでしょうか。



いつもとちがうAさんの姿に気づいた保育者は、ちょっと離れた窓のカーテンのところから現れたり隠れたりして、自分の存在を知らせてみました。すると、初めは恥ずかしがっていたものの、徐々に近づいてきて、この笑顔！もしかすると、前回一緒に遊んだことをおぼえていて、保育者を探していたのかもしれない。

子どもはこのように「愛着（アタッチメント）」の対象（＝「安全基地」）を徐々に家庭の外にも広げていきます。その発達の手すりは「一直線」ではなく「行ったり来たり」です。そして、一見すると「退行」のように見える、この「行ったり来たり」の手すりの中に、自分で自分の世界を広げていく子ども自身の「力強い学びの力」が示されているのです。

なぜなら、その「手すり」は、「自分」と「お母さん」と「家庭の外の他者」とで編み上げた「織物」のような作品であり、その「糸」が多様であればあるほど、そして何度も密に織れば織るほど、より丈夫で、美しい作品になるからです。

笑顔になって安心した後、Aさんは長細いお手玉をつなげる難しい遊びを創造し、それを『でんしゃ』に見立てるといって高度な遊びを展開していきました。子どもは「孤立した主体」として発達していくのではなく、さまざまな関係の網の目に支えられながら「共・主体」として発達していくのです。その過程は、子どもの育ちであるとともに、私たちの社会を「人間にやさしい社会＝美しい織物」としてみんなで織り上げていく過程なのです。